



James Taylor
"Gorilla"
Warner Bros. [US] ●BS2866
[1975] ▶ワーナー ●WPCR13
823

incl. 'Mexico'

親に手紙を送り援助を頼むが、実家も大変なんだと簡単な絵葉書しか返ってこないことがないからはずりとは分からないけど (I never really been, so I don't really know)、「僕は行きたくてたまらなく (But I'd sure like to go)」と歌う。お金がなくたって、なんとかなってしまおうのが、かつてのメキシコだった。ジェイムズはボストン生まれだから、「国境の南」への憧れがひととき強かったのかもしれない。『ゴリラ』が発売されたのは、夏を控えた5月だったということもあり、ジェイムズはこの曲をアルバム冒頭に持ってきたのだろう。そうそう、当時、俺がサンフランシスコに向かう途中でヒッチハイクしたら、たまたまこの曲がカセットでかかってた。それを聴いてすぐメキシコに行こうと決め、2週間ほど過ごしたなんてことがあったな。

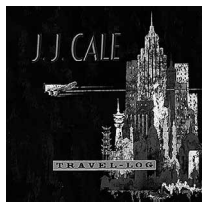
では、アメリカ人が実際にメキシコの国境の街に行ってみたら、どんな感じなのだろう？ そんなことを歌詞にしているのが J・J・ケイルの「ティファナ」だ。90年の『トラヴェル・ログ』に収録されている。歌詞の冒頭で「Just below San Diego」とあるように、ティファナはカリフォルニア州サンディエゴの隣にある。そのすぐ後の歌詞「Tijuana, land of broken dreams」にもあるように、「この街は、壊れた夢の土地 (land of broken dreams)」と呼ばれている。昔からアメリカ人がよく遊びに行く街だ。また、国境を渡ってアメリカに入るつもりで、メキシコだけでなく中南米や南米からも人々が集まってくる。

そこでは、スペイン人のような黒い瞳で色目を使う女たちが、月の光の下で踊っている。そして、▲ねえグリーンゴ、私たち国境の向こうまで連れてってくれない？ あたしのことをあなたの娘だと言ってよ▼と迫ってくる。自分をメキシコ女との間にできた子供だと偽り、アメリカに入れてくれ、というわけだ。「Tinggo」は、メキシコ人のスラングで、アメリカ人のことを指す。裏通りには、プライドの高い若いチンピ

ラ男どもが、まるでティファナ王国の番人であるかのようにたむろしている。彼らは▲なあグリーンゴ、俺たちを国境の向こうまで連れていってくれないか？ 25セントでも働くと持ちかけてくる。実際にアメリカ人がティファナに行くと、こんな感じで話しかけられることが多い。彼らしいシンプルで歌詞が少ない曲だが、そんな街の様子が実に生き生きと伝わってくる。

● ジャクソン・ブラウンの「泉の聖母 (Our Lady Of The Well)」は、彼の73年のアルバム『フォー・エヴリマン』の2曲目で、「ティック・イット・イージー」からクロス・フエイドで入ってくる。当時はヴェトナム戦争が終わりかけているころ。アメリカ人にとっては、まさに迷える時代だった。

この曲の主人公は、どこか砂漠を越えたところにある土地に住んでいる。ファース



J.J. Cale
"Travel-Log"
Silverstone [US] ●1306-1J
[1990] ▶Silverstone [US]
●8287651232

incl. 'Tijuana'

STRING THEM ALONG

ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介



第6回

アメリカ／メキシコ国境にまつわる歌

アメリカには基本的に二つの国境がある。一つはカナダとアメリカの国境で、この国境は世界で一番長く、軍のセキュリティがいらないことでも知られている。経済格差があまりなく、無断で渡る人はほとんどいないから、軍隊は必要ない。ただ国境にはフェンスも川もないので、知らないうちに国境を越えてしまうことはあるけどね。

それに比べると、メキシコとアメリカの国境は様子が違う。かつてのメキシコは、アメリカ人にとって気軽に遊びに行く国であり、犯罪者が逃げ込む国だった。反して、メキシコ人や南米、中南米の人たちにとってのアメリカは、夢が叶う国というイメージ。しかしメキシコ人はほとんどがグワイザをもらえないから、メキシコからアメリカにくる不法入国者は毎年何十万人もいる。

だから国境は、ほぼ全域が警備されている。不法侵入者はリオ・グランデ川を渡つたり、国境のフェンスを乗り越えたりする。たとえ国境を渡つても、アメリカ側には何百キロも砂漠が続いている。歩いて渡るのは命がけだ。そこでよくコヨーテと呼ばれる運び屋を使うが、その中にも悪いやつがいて、ひどい目に遭う人たちも多い。砂漠で放っておかれ、死んでしまう人もいる。

● 今回は、そんな国境を介したアメリカとメキシコのストーリーを紹介しよう。最初はアメリカ人から見たメキシコの曲だ。

ジェイムズ・テイラーの75年のアルバム『ゴリラ』の1曲目「あこがれのメキシコ (Mexico)」は、邦題の通りジェイムズのメキシコへの憧憬を歌で表現したものだ。ファースト・ヴァースでは、▲そろそろ君はどこかに行きたがっているんだらうけどアメリカを旅するのはうんざりだね、悩みなんか置いていけ▼と友人に触発されて、そうだ、太陽がキラキラ燃えるメキシコに行こうと思いついた心の内が歌われている。セカンド・ヴァースでは、眠たげなのに目に燃える炎を宿したメキシコ女性 (Sleepy senorita with the eyes on fire) を前にした、目は眠そうなのに電気が流れる電線のように体がビリビリしているアメリカ男 (Americano got the sleepy eye but his body's still shaking like a live wire) の姿を想像し、さらに、▲太陽は低く沈み月は明るく夜を照らします。すべてがうまくいくんだ▼と想いを馳せる。

最後のヴァースでは、メキシコで暮らす男の金が尽き腹ペコになってアメリカの母

ト・ヴァースでは、朝日のずつと下で、あなたはあなたの人生の、僕は僕の人生のダンスを静かに踊り始めた、と歌われる。つまり、これからは互いの道を歩んでいく、という別れの意味だ。ふたりは言葉も交わさず井戸から水を汲み、平野の向こうの静かな山並みに目を凝らす。

セカンド・ヴァースでは、△でも僕は、この平安を見つけるために砂漠を越えて遠い道のりをやって来た▽と歌われる。そこでは、太陽の光の中であなたの家族がずつと土地を耕し暮らし続けている。それなのに、僕の国はまったく別の方向に進んでしまった…。ここでの「my country」とはもちろんアメリカのこと。そして、「across the sand」「people in the sun」といった表現は、メキシコを強くイメージさせる。

サード・ヴァースでは、母国に残してきた人々のことが歌われる。△僕の家には、残酷で無慈悲な手の影が広がる。でも、いくつかの強靱な魂には、愛と真実がまだ残されている▽。彼はアメリカから遠去かって暮らしてみたこと、そして「あなた」の笑顔のおかげで、進むべき道を誤ってしまった自分の国にも、まだ真摯な心が残っていることが理解できた。そして、僕の心は

の△金で舗装された街△とは、かつてのスペイン人が新大陸に実在すると信じた△黄金の都市△になぞらえた表現で、もちろんアメリカのこと。でも、そのすぐ後にお前の望みよりもはるかに多くを失うことだつてあるんだ、という忠告が続く。壊れた約束の地に着くと、すべての夢がお前の手からこぼれ落ちる。そのときになつて気持ちを変えても遅すぎることに気づくんだ：彼らはテキサスとメキシコの国境、リオ・グランデ川を歩いて渡る。△砂の上には幾千もの足跡が残され、誰にも分からない秘密を明らかにしながら、川は我々の生と死の狭間を息を流れていく。教えてくれ、次に国境を越えるのは誰なのか▽。夢を追いかけるためにリスクを犯してアメリカに辿り着いても金持ちになれるのはほんのひと握り、という「秘密」を目の当たりにし、密入国者は△金で舗装された街△の中にも、目に見えない「国境」があることを思い知らされる。この曲にはいくつかのヴァージョンがあるが、ここではフレディ・フェンダーが歌い、リオ・グランデを越えていった数多のメキシコ人の哀切を、見事に表現している。



Jackson Browne
"For Everyman"
Asylum [US] ●SD5067
[1973] ⇨Asylum [EU] ©8122
789132
.....
incl. "Our Lady Of The Well"

彼らとともにある (That My heart remains among them) のだから、彼らのもとに帰らなければならぬ (And to them I must return) と決意する。

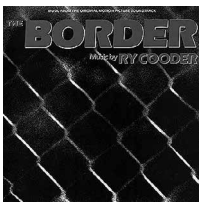
最後のヴァースでは、△マリア、もしあなたが僕を探すなら、あなたは僕を日陰の中に見つけるだろう▽と歌われる。暑さを避けるために主人公は日陰でまどろんでいるが、頭の中では帰国の決意を固めている。この曲で歌われる「あなた」とは一人の女性としての「マリア」のことであり、主人公が母国を離れて過ごした土地やその人々のことをも表わしているのだと思う。そしてこの「Maria」は聖母の名前であると共に、アメリカ人にとってメキシコ女性を象徴する名前と言つていい。つまり、メキシコでの暮らして初めて母国の真の姿を理解できた主人公が、そこで見つけた心の平安や正しい生き方を携え、家族や仲間のもとに戻

俺が住んでいたサンフランシスコにも、不法入国のメキシコ人がたくさん住んでいた。彼らには肉体労働をしている人が多い。毎朝、ホームセンターのそばには何人かの潜りのメキシコ人が集まっていた、そこにペンキ屋や大工、庭師たちがやってくる。トラックがそばに行くと、メキシコ人たちが羨ましいにトラックの運転手の窓に飛びついていく。運転手が必要している技術を持っていけば、トラックの後ろに飛び乗って現場に向かうんだ。メキシコ人がいなければこういう仕事は成り立たない。ほとんどのメキシコ人は、アメリカで貯めた金を田舎で暮らす貧しい家族に送っている。彼らは何人かでシェアハウスに暮らして、あまり金を遣わない。でも、サンフランシスコにあるミッシオン・ストリートには、彼らが通うメキシコ人向けの飲み屋が何軒かある。俺はそのなかの一軒によく行つていた。店の名前は「La Teranza」▽。そこは、なげなしの金を休みの日に遣いにくるメキシコ人でいつも混んでいた。店に入るたびに右側に長いバー・カウンタがあり、向かいには腰ぐらいの高さの壁、その裏にはメキシカン・レストランがある。でも毎週金曜と土曜になると、テーブルを壁に当

つていく。そんな姿を描いた曲だ。曲の最後には、△マリア、あなたが来るのなら、僕が作ったものを見せてあげる。僕らの井戸の女の絵を▽とある。ここでの「僕らの井戸の女の絵 (our lady of the well)」とは、ファースト・ヴァースの場面で主人公が描いたマリアの絵であり、彼がメキシコで得たものの象徴でもあるのだろう。

逆に、メキシコ人から見た米墨この国境の歌をみてみよう。ライ・クーダーの「アクロス・ザ・ボーダーライン」。82年にリリースされたジャック・ニコルソン主演の映画『ザ・ボーダー』のテーマ・ソングで、ライ・クーダー、ジム・ディッキンソン、ジョン・ハイアットの共作だ。

△国境を越えたすぐのところ、すべての道が金で舗装された街があるという噂を聞いている▽という歌詞で曲は始まる。こ



Ry Cooder
"The Border"
Backstreet [US] ●BSR6105
[1982]
⇨Raven [US] ©RVCD209
.....
incl. "Across The Borderline"

ててダンス・フロアをつくり、バンドが出てみんな踊る。男と女の割合は8対2。男たちが夢中になって、女を踊りに誘う。そこで演奏する音楽はテキサス・トルネイドスやフラッコ・ヒメネスが演奏するテックス・メックスだ。バンドはアコーディオン、ベースとドラム、時々ギターもいるが、シンプルな機材で客を盛り上げる。そこでよく聴いていたのが、フラッコ・ヒメネスの「アイ・テ・デホ・エン・サン・アントニオ」だ。この店に来れば、現地に行かなくても、音楽と雰囲気を通して十分にメキシコに行つた気分になれる。店に来る彼らの夢は、永住権や市民権を取つて、田舎にいる家族をアメリカに連れてくることだ。入国管理局に捕まらなければね△。実は、俺がこのバーに初めて行つたとき、カウンタに座つてコロナを頼んだんだ。その時、バーテンダーは何も言わないでコロナを出してくれたんだけど、飲み始めて周りを見渡したら誰もコロナを飲んでいない男がいなかった。メキシコ人は、わざわざアメリカに来てコロナなんか飲まないらしい。全員、バドワイザーを飲んでいて。夢の国△に来たんだから、その国のビールを味わうんだね。確かにそうだ。